東南アジア研究　60巻1号　2022年7月

漢喃版『佛説天地八陽經』に見る字喃の方言性

清　水　政　明*

Dialectal Features of Nôm Characters in the Sino-Nom Version of *Phật Thuyết Thiên Địa Bát Dương Kinh*

Shimizu Masaaki*

Abstract

This paper aims at analyzing the dialectal features of Nôm characters used in the Sino-Nom version of *Phật Thuyết Thiên Địa Bát Dương Kinh* contained in the list of Sino-Nom documents preserved at Canh Phuoc Temple in Bangkok and brought to Japan by the late Professor Yumio Sakurai, from the viewpoints of historical phonology and lexicography. Analysis of the phonetic component of each character will show the features of Central and Southern dialects of the Vietnamese language. So far, a primary index of the Southern Nôm characters has been compiled by Vũ Văn Kính [1994] based on some famous literary works, such as *Lục Vân Tiên*, *Dương Từ Hà Mậu*, *Nguyễn Hữu Huân tiểu truyện*, *Kim Thạch Kỳ Duyên*, *Ngư Tiều Vấn Đáp*, etc. The documents in Sakurai's list might provide a certain amount of additional data for the index.

Keywords: *Phật Thuyết Thiên Địa Bát Dương Kinh*, Nôm characters, Vietnamese dialects, phonological and lexical features

キーワード：佛説天地八陽經，字喃，ベトナム語方言，音韻的・語彙的特徴

はじめに

故桜井由躬雄氏がタイから将来し，現在京都大学東南アジア地域研究研究所に所蔵される「景福寺資料」は，在タイベトナム仏教史のみならず，ベトナム仏教史一般にとって極めて重要な資料群であることは言を俟たない。中でもその資料的価値の高いものとして，字喃訳解本

* 大阪大学大学院人文学研究科；Graduate School of Humanities, Osaka University, 3-5-10 Semba-higashi, Minoh, Osaka 562-8678, Japan
e-mail: shmz.hmt@osaka-u.ac.jp
DOI: 10.20495/tak.60.1_40

が挙げられる。この点について，桜井［1979: 80］は，①これには百歳修業経，報恩経國音，般若心経演義，警策，攻文疏牒，振忠，大彌陀解義，大孝目連捷孟闌盆行，合集準提彌陀儀釋集要序，入懺文，沙彌律，釋氏源流，釋氏國音ほかがある。②従来文学作品に用いられた字喃については若干の紹介があるにせよ，文学よりさらに民衆に根付いていたはずの仏教信仰の場における字喃資料の大量の発見は，今後の字喃研究に果たす役割は極めて大きいであろう。③一例として，『佛説天地八陽經』の題目につけられた字喃文は「徳伏吶経八陽冲歪坦」，クオックグー[1] になおせば“Đức phật nói kinh bát dương trong trời đất”となり，「天地の中の八陽経について仏様が話される」という極めて平易なベトナム語にかわっている。このような平易なベトナム語の説教がなされたとすれば，現在タイの華僑寺院で見られるような呪文としての読経とはかなり異なった訳解宣教への努力がベトナムの仏教寺院では精力的になされていたことを示すものとなろう，と指摘している。1980～90年代の字喃研究の発展は目覚ましく，特に字書等の工具書類が陸続と出版された。中でも1999年設立（2019年解散）のNôm Preservation Foundationが開発したNôm Lookup Toolは字喃文献の読解作業に画期的な便宜をもたらした。[2] また，仏典の字喃訳解本に関しても，筆者による『佛説大報父母恩重經』の分析を含む所収字喃の分析作業が進められている［清水 1996; Shimizu 2020］。

以上の背景の下，字喃資料の宝庫とも言える「景福寺資料」を文字レベルで分析する基礎が整いつつある。そこで本稿では，桜井氏自身がその字喃訳解の例として挙げる『佛説天地八陽經』を取り上げ，その所収字喃を個々の文字のレベルから分析することを試みる。「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」（桜井目録）の中で，「天地八陽經」の名を冠した仏典が8種見える。全タイトル百数点に占める割合から見ても，この仏典が当時広範に利用された形跡が窺える。目録「Thiên（天）」の項目に紹介された8種のうち，「（佛説）天地八陽経 手写本（M）」（本誌所収目録番号WS001）及び「（佛説）天地八陽経 手写本（M）」（本誌所収目録番号WS007）が字喃対訳本である。本稿では，後者の写本を底本とし前者を参照しつつそこに記された字喃を分析することにより，この字喃訳文がベトナム中部から南部にかけての方言に基づいて，19世紀以降に作成された可能性を指摘する。以下，テキストの来歴と出版時期，字喃の転写と分析の方法，分析結果とその意義について報告する。

I　テキストの来歴と出版時期

本稿の主な対象とするテキストは桜井氏がタイから将来し，現在京都大学東南アジア地域研

1) 現代ベトナム語正書法Quốc ngữを指す。
2) 筆者も2017年以来，当FoundationのAdvisory Councilとしてデータベース所収字喃の出典調査等の作業に当たっている。

究研究所に所蔵される『佛説天地八陽經』（全39葉，写本）である。このテキストは『佛説報恩懺法巻中』と共に1冊に綴じられているものの，料紙の差異から別本とみなすべきものである［小島・矢野 2018］。本経典は中国で撰述されたいわゆる偽経類に属し，小田［2010］は，その内容を「仏教が民衆の間に広まるなかで，伝統的な道教的風土あるいは土俗的信仰との相克を強く意識した一種の創作にちがいない」と説明する。また，その流布した地域について，トルコ語訳写本・版本に加え，漢語日本古写本，漢語敦煌写本，漢語中国古写本，漢語朝鮮本，漢語越南本，チベット語訳敦煌本，モンゴル語訳版本，トルファン漢語写本，Xara-xoto漢語版本，西夏語写本断片本が紹介されており，中国で撰述された本経典が，東アジアの各民族に広く受容された事実が窺える。

以下，テキストに付された奥付の内容，避諱文字，及び料紙分析の結果を主な根拠として，その出版時期について考察する。なお，料紙分析の詳細については，本誌所収小島・矢野論文を参照されたい。

はじめに，第39葉後半に記された奥付の内容を以下に示す。

阮氏孝奉供　惟願
父母現在増福壽死後直方西世世得道轉法輪
九玄七祖同登極樂國
天 運 乙 酉 年 十 二 月 吉 日

潘求福奉寫

まず，干支で示された「乙酉年」が西暦何年に相当するかが問題となる。今暫時的に18世紀以降の西暦年を列挙すると，1705，1765，1825，1885，1945年となる。「潘求福奉寫」の文言から，これらを含むいずれかの「乙酉年」が筆写された年とみなして問題ないであろう。その筆写年を特定するに当たり，写本内に見られる避諱文字について考察する。

本写本では，「時」と「實」の2字が避けられた形跡が窺える。それぞれ「時」は「辰」，「實」は「寔」に置き換えられている。「時」の字は，阮朝第四代嗣徳帝（在位1847～83年）の諱「福時」に含まれ，「實」の字は阮朝第二代明命帝（在位1820～41年）の皇后佐天仁の諱「胡氏華」，「胡氏實」に含まれる。したがって，本テキストは少なくともこれら2字を避ける必要が生じた嗣徳帝在位期以降の筆写ということになる。これは上記西暦年のうち，1885年あるいは1945年が候補として残ることを意味する。一方，写本全体を見渡すと，これら2字の回避が徹底しているわけではなく，「實」，「時」がそのまま記されている箇所が多数見受けられる。

一方，正史『大南寔錄正編』の記事を見ると，避諱の令は1886年3月を最後にそれ以降見

られない。その内容はそれまで（明命・紹治・嗣徳期）の厳格な避諱令の内容を緩和し，「花・妊・烘・紅・虹」等の字を避けて書く必要がなくなったことを記している。実際の文書を見るとそれ以降も避諱字体[3] が随所に見られ，避諱字体そのものは残ったようだが，一方で1884年第二次フエ条約以来，フランスのフエ進攻と国内の混乱により，朝廷による避諱の徹底そのものが難しかった可能性も想定できる。

次いで，年号「天運」について考察する。「天運」の年号は，清代に台湾で自立した張丙（?～1833）が西暦1832～33年にかけて使用した他［連 1975］，清代の秘密結社天地会が用いた年号として知られる［田仲 1990］。前者は干支「乙酉」と合致せず，後者は田仲の考察によると西暦1853年がその元年と考えられることから，後者を基本に考えると，やはり「天運乙酉」は1885年あるいは1945年ということになる。[4]

もう一つの重要な問題として，この写本がベトナムで筆写されたものか，タイで筆写されたものかという問題がある。それを確定することは極めて難しいが，例えば桜井目録に含まれる『警策巻下』には「景福寺弟子因縁寫」の文字が巻末に見られ［桜井 1979: 83］，景福寺で多くの筆写がなされた可能性も考えられる。したがって，本写本内の避諱が徹底されない理由は，タイで筆写されたことに帰する可能性も考えられる。

最後に，本写本の料紙について，本写本が竹紙に書かれていることが解明されており［小島・矢野 2018］，パルプを用いた近代製紙技術の定着する以前の写本である可能性が考えられる。ただ，それを確定するにはベトナムの近代製紙技術の研究成果を待つこととなり，ここでは本写本が19世紀以降のものであることを指摘するにとどめる。

『佛説天地八陽經』の経典本文について，小田［2010］は「八陽經」あるいは「八陽神呪經」の名を冠する経典類をその内容から3種に分類し，それぞれに属する経典の成立時期を第1種8～10世紀，第2種9～10世紀，第3種10～15世紀と推定する。本稿の対象とする越南本はその第3種に属し，同種には，中国（静古）本，モンゴル語訳版，朝鮮李朝版本が含まれる。他の経文との比較から，越南本は第1種と第2種の合流を示し，15世紀以降の成立と結論づけている。

以上を総合すると，15世紀以降に成立した経典本文をベースに，奥付の干支年，避諱文字の出現状況，年号「天運」から，本写本は1885年または1945年に筆写された可能性が指摘できる。また，料紙分析により本写本が竹紙に書かれたものであることが判明し，それはパルプによる近代製紙法が普及する以前のものである可能性が想定できる。

---

3) ベトナムにおける書面上の避諱の方法として，「實」を「寔」に置き換える「改字」に加え，「宗」の一画を欠き「宗」とする「欠筆」，「利」を左右に分け「左从禾右从刀」と記す方法等が知られる［Ngô 1997］。

4)「天運」年号については，学習院大学文学部武内房司教授に多くを御教示頂いた。

II　字喃の転写と分析の方法

本写本のスタイルは，経典本文を成す漢文の傍らに，逐語訳に近いベトナム語の訳文が，のべ約4,500字の字喃により記されている（付録1参照）。それは一般に「解音」（giải âm）と呼ばれるスタイルである。本稿では，その訳文の字喃を主に音韻論的側面から分析することにより，本写本の特徴の一端を明らかにする。また，一部の方言語彙についても紹介する。訳文の字喃を分析する上で必要な作業は，1．漢文の経文内容を参考に，各字喃のローマ字転写を行う。2．字喃の読音と表音部分のベトナム漢字音を比較し，字喃の音韻的特徴を分析する。3．その特徴を共時的・通時的側面から考察する。共時的考察は，特に地域的バリエーションに焦点を当てて考察する。

字喃の転写作業は，各種辞書に登録された字喃読音と漢文本文との対応を手掛かりに，個々の字音を現代ベトナム語正書法クオックグーに転写することである。転写に際しては，Nôm Preservation Foundationが公開するNôm Lookup Toolをはじめとする各種検索ツールが，部首，総画数，読音からの検索が可能であり，極めて有用である。[5] ただし，字喃は全ての字形が組織的に同時に発布された類の文字ではなく，筆者により比較的自由な字形が許された文字であることから，全字形が上記データベースに収録されているわけではない。特に本写本のように，地域的バリエーションを含む資料の場合，その転写作業は多くの困難を伴う。したがって，表音部のベトナム漢字音を手掛かりに妥当な字音を割り出す作業が必須である。特に必要とされるのは，各時代に特徴的な語彙に関する知識と，ベトナム漢字音と字喃読音との関係を検討するためのベトナム語史的音韻論の知識である。それに加えて，ベトナム独自の文字の略し方，くずし方に習熟する必要もある。例えば，本写本に頻出する「邛」は「鄧」の略字体であるが，この語はベトナム中部以南で通用する語彙 *đặng*[6] であり意味は獲得や可能を表す動詞，北部標準語の *được* に対応する。「鄧」の字形は上記各種データベースに登録されているものの，「邛」の字形は *Tự điển Chữ Nôm*（Viện Nghiên cứu Hán Nôm, 2006）や *Bảng tra Chữ Nôm miền Nam*［Vũ 1994］等限られた資料に見えるにとどまる。同様に28a2[7] に見える「𤳳」は，書物の形状を有する名詞に冠する類別詞 *cuốn* を表記する字喃であるが，上記の全てのデータベース，及び筆者の手元にある各種字喃字典には見えない。一般には「卷」「捲」「𦁠」などの字形が使われる語である。この字形は，「誑」のベトナム特有の異体字とも取れるが，*cuốn* を表記すると認定できる根拠は，その字形が表音部「狂」と表意部「言」から成る形声字，あるいは「誑」の仮借字であり，表音部「狂」または「誑」の漢字音 *cuống* と読音 *cuốn* の関係が，音節末子音 ŋ

5）http://www.nomfoundation.org/nom-tools/Nom-Lookup-Tool（2022年5月24日閲覧）
6）以下，正書法による転写はイタリックのローマ字で，実際の発音あるいは再構形はIPAで表記する。
7）「第28葉前半第2行」（a: 前半，b: 後半）を表す。

と n の対応関係を示すことにある。これは書物の類別詞 *cuốn* が中部以南の方言では kuːŋ˧˥ と発音され，中部以南で kuːŋ˧˥ と発音される漢字音 *cuống* を表音部として選択したものと理解される。この問題については次章で詳説する。同じく「狂」を同一語彙の表音部に選択した他の例として「𢧐」が上記 Vũ［1994: 24］に見える。

字喃読音と表音部の漢字音の関係については，上記「獗」の例に加えて，「𢇁」の字形を例にもう 1 点指摘しておく。当該字形は写本全体を通して 7 回（12b3, 12b4, 18a1, 24a4, 28a2, 30a1, 31a4）見られる。これは漢語「語」等に対応する字喃で，現代ベトナム語の「言葉」を表す *lời* に対応する。同様の語を表す字喃に「𤾓」等があることから，[8] この字形は「麻」の略字体「广」と「利」から成るものと解釈される。では，それぞれの構成要素が表音部なのか表意部なのかが次の問題となるが，結論から言うと，いずれも表音部であり，*lời* の古形 *mlời* に見られる音節初頭の子音連続を個々の要素が表すいわゆる「会音」字と分析できる。つまり，麻 *ma* が子音連続の第一要素，利 *lợi* がその第二要素＋韻を表していることになる。このような例を読み解くには，やはりベトナム語音韻史の研究成果を参照する必要がある。

最後に，個々の字喃の語彙的・音韻的特徴を分析した結果を地域的バリエーション（つまり方言）の観点から解釈することになる。上記「獗」の例についていえば，北部方言の音節末子音 -n/t が中部以南の地域では一般に -ŋ/k が対応することが広く知られており，その等語線（方言的特徴の境界線）がどこにあるのかを考察する必要がある。それに関しては，筆者ら自身による方言調査の知見［Shimizu 2014; Shimizu and Kondo 2017］や Hoàng［2004］等の研究が参考となる。具体的な方法については，III–2 で詳述する。

III　分析結果

III–1　所収字喃の構造面からの分類

まず，訳文に含まれる約 4,500 の字喃転写作業を通じて，本写本に含まれる字喃に共通する以下の構造的特徴を指摘する。本写本に含まれるほぼ全ての字喃は，少なくとも 1 つの表音部を含み，それに表意部が付加されない「仮借字」と表意部が付加される「形声字」の 2 種に分類される。本写本同様，他のテキストに見られる大多数の字喃がこの 2 種に帰属することが明らかにされつつあり［Shimizu 2020］，字喃の文字学的特徴を考える上で重要である。表音部のベースとなる字音は，基本的に漢字のベトナム式読音（ベトナム漢字音）であるが，早期ベトナム漢字音（Early Sino-Vietnamese）[9] や，他の字喃の字音が選ばれる場合もある。また，ごく

8) http://nomfoundation.org/common/nom_details.php?codepoint=2b717（2022 年 5 月 24 日閲覧）のフォントを利用。
9) 早期ベトナム漢字音（Early Sino-Vietnamese）については，Alves［2014］などを参照。

少数の「会意字」が見られる他，古い資料になるほど「会音字」の例が見られる。[10]

本写本に見られる，他の字喃の字音をベースに制作された字喃の例として，「綈」（*nối* 繋ぐ）が挙げられる。[11] この字は「糸」を表意部とし，表音部「肖」が「山」を意味する字喃（表意部「山」＋表音部「内」*nội*）である。因みに，同じく *nối* に対して訳文の他の箇所に「肖」の字形も見られ，[12] この場合は字喃の仮借ということになる。

一方，本写本にはたった1例ずつ会意字（「天」を意味する「𡗶」*trời*）と会音字（上記「𠰺」*lời*）が見られるが，それ以外の一見会意字に見える字形は，本質的には形声字のバリエーションと解釈できる。[13] 会音字は陳朝から黎朝初期の比較的古い文献及び石碑に頻繁に見られるが，阮朝の文献には極めて稀である。本写本に見られる「𠰺」は音節初頭の子音連続 /ml/ を表示しており，Vũ［2019］は「/bl/ と /ml/ の子音連続は19世紀初期までクオックグー表記のいくつかの語の中に存続し続けた。」と指摘する。/ml/ については字喃にも同様の痕跡が見えるということになる。

以上，本写本に見られる字喃の構造を表1にまとめる。繰り返しになるが，1. と 2. がメインで，3. と 4. は1例ずつのみである。

表1　本写本に見られる字喃の構造面からの分類

構成要素	漢字ベース	字喃ベース
1. 仮借 （表音要素）	**昌** *xương*（＜昌 *xương*）「骨」（29b3）	**肖** *nối*（＜肖 *núi*）「繋ぐ」（21b2）
2. 形声 （表音要素＋表意要素）	**𠯑** *miệng*（＜口＋皿 *mãnh*）「口」（8b5, 29b2）	**綈** *nối*（＜糸＋肖 *núi*）「繋ぐ」（2a1）
3. 会音 （表音要素＋表音要素）	**𠰺** *lời*（＜*mlời*: 麻 *ma* ＋ 利 *lợi*）「言葉」（12b3, 18a1, 24a4…）	
4. 会意 （表意要素＋表意要素）	**𡗶** *trời*（天＋上）「天」（1a1, 3b3, 3b5…）	

10) 字喃の造字法に関しては，清水［2022］を参照。また，従来の字喃の分類法には Hannas［1997］等があるが，細かい指標による分類として Nguyễn［2014］がよく知られている。
11) 本文「相續不断」の訳文「穷綈庄搋」（*cùng nối chẳng dứt*）に見える（2a1）。
12) 本文「孝敬相承」の訳文「討く肖饒」（*thảo kính nối nhau*）に見える（21b2）。
13) 例えば，本文「持戒者少」の訳文「得伻く時乏」（*người giữ giới thì ít*）に「伻」の字が見え（2a3），「守る」を意味する *giữ* と転写できる。「伻」の場合，人偏と「守」両方が表意部というのが唯一の可能な解釈であるが，一方 Nôm Lookup Tool のデータベースに同じく *giữ* を表す「佇」の字形が見える。この場合明らかに人偏が表意部，「宁」（*trữ*）が表音部と解釈できる。恐らくこちらが本来の字形であり，後の時代に「守」と「宁」の字形の類似性と文字全体の意味「守る」からの類推により前者が後者に置き換わったものと考えられる。因みに，同データベースには，同語彙に「𡧍」の字形（表意部「守」＋表音部「宁」）も見られる。

III–2　所収字喃の方言性

III–2–1　南部字喃の特徴

以下，字喃読音と表音部漢字音（あるいは字喃読音）の音韻対応を主な手掛かりとして，それらが表現する語彙の特徴にも留意しつつ，本写本所収字喃の特徴と，記された言語の特徴の分析に移る。目的はその方言性を見極め，テキスト作成の経緯を解明する一助とすることである。字喃の方言性について言及した先行研究は極めて少ないが，それらはいずれもベトナム南部で作成された作品所収のものを対象としている。Vũ［1994］は，『蓼雲仙』，『楊慈何茂』，『阮友勳小傳』，『金石奇緣』，『漁樵問答』等の南部の作品から収集された字喃のうち特徴的なものを抽出し，ローマ字転写音及び画数から検索できるリストにまとめた。また，Nguyễn［2009］は，特に『蓼雲仙』に見られる南部特有の字喃の分析を試みた。後者に紹介された南部字喃の特徴は基本的に前者に包括されるので，ここではVũ［1994］の内容にしたがって，文字論的・音韻論的側面から南部字喃の特徴を以下にまとめる。

（1）Vũ［1994］による南部字喃の特徴

A.　文字論的特徴

<u>特殊文字の利用</u>

（a）蘇州号嗎の利用

例）**拦** *bắt*「捕える」：表意部漢字部首「扌」＋表音部漢字「㐅[14]」*bát*（『蓼雲仙』）

B.　音韻論的特徴

<u>音節初頭子音</u>

（b-1）$v \rightleftarrows d$

例）**用** *vùng*「もがく（*-vẫy*）」：表音部漢字「用」*dụng*（『阮友勳小傳』）

<u>介母音</u>

（b-2）$o/u \rightleftarrows \phi$

例）**端** *đan*「編む」：表音部漢字「端」*đoan*（『金石奇緣』）

<u>母音</u>

（b-3）/ă/ ⇄ /a/

例）**𦍒** *tai*/taj/「耳」：表音部字喃「𦍒」*tay*/tăj/（『楊慈何茂』）

𠰁 *hay*/hăj/「または」：表音部字喃「𠰁」*hai*/haj/（『楊慈何茂』）

14）蘇州号嗎で「八」（ベトナム漢字音 *bát*）。ベトナム南部の漢方薬業界でかつてよく使用されたと言われている。

音節末子音

（b-4）*n* ⇄ *ng*

例）**終** *chun*「縮む」：表音部漢字「終」*chung*（『漁樵問答』）

乾 *càng*「更に」：表音部漢字「乾」*càn*（『楊慈何茂』）

（b-5）*t* ⇄ *c*/k/

例）**北** *bắt*「捕える」：表音部漢字「北」*bắc*（『楊慈何茂』）

（b-6）*n* ⇄ *nh*/ɲ/

例）**信** *tính*「数える」：表音部漢字「信」*tín*（『金石奇縁』）

声調

（b-7）hỏi 調⇄ ngã 調

例）**閑** *ngỏ*「吐露する」：表音部字喃「閑」*ngõ*（『金石奇縁』）

（1.a）に見る蘇州号嗎の字喃字形への混入は極めて興味深い課題であるが，稿を改めて考察することとし，ここでは（1.b-1）から（1.b-6）までの音韻的特徴について補足説明しておく。いずれも（2）に示すような北部方言と比較した際の南部方言の音韻的特徴［Hoàng 2004; Shimizu 2014; Shimizu and Kondo 2017］に起因する現象である。

（2）北部方言と南部方言の音素対応

音節初頭子音

	北部	南部	正書法
a.	v	j	(*v*)
b.	z	j	(*d*, *gi*)
		ɽ~r/ʐ	(*r*)
c.	tʃ	c	(*ch*)
		ʈ~ʈʂ	(*tr*)
d.	s	s/ʃ	(*x*)
		ʂ~ʃ	(*s*)

音節末子音

	北部	南部	正書法
e.	n/t	ŋ/k	(*n*/*t*)
f.	ŋ/k	ŋ/k	(*ng*/*c*)
g.	ɲ/c	n/t	(*nh*/*ch*)

母音

	北部	南部	正書法
h.	ă	a _{w, j}	(*au*/*ay*)
i.	a	a _{w, j}	(*ao*/*ai*)

まず，（1.b-1）の例は，（2.a），（2.b）の音韻対応により，北部方言では音節初頭子音 /v/，/z/ で発音される字音が南部ではいずれも /j/ で発音されることから生じた字形である。つまり，北部では /z/ と発音される音節初頭子音を有する漢字音が南部では /j/ と発音され，それをもって，北部では /v/ と発音されるが南部では /j/ と発音される語彙を表音した例ということになる。

（1.b-2）の例は，北部方言に見られる介母音 /w/ が，南部では地域や世代により不在となる事実を反映した字形である。[15]（1.b-3）の例は，（2.h），（2.i）に示した環境における母音 /a/ の長短対立の不在に起因するものである。（1.b-4），（1.b-5）の例は（2.e），（2.f），（1.b-6）は（2.g）に起因する諸例である。最後の（1.b-7）は，南部方言に一般的な北部方言の hỏi 調と ngã 調の合流の状況を反映する例である。

特に注意を要する例は，（1.b-3）と（1.b-7）である。これらが南部字喃の特徴であると認定できるのは，それらが漢字音ベースではなく，字喃読音をベースとしているからであり，既存の字喃の表す語彙が同定できれば，理論的には漢字音で区別ができない母音の長短や（音節初頭子音の種類により生起が制限される）声調の区別も，表現できることになる。（1.b-3）の場合，既存の字喃「𢷬」（*tay*/tăj/「手」）を仮借字として利用し *tai*/taj/「耳」を表現する。音節末子音 /j/ の前では母音の長短対立が中和される南部方言であるからこそ表音要素として字喃「𢷬」を選択しうるのである。同様に，（1.b-7）も hỏi/ngã 調の対立のない南部方言であるからこそ元来 ngã 調の「閈」*ngõ*（「小径」）を利用して hỏi 調の *ngỏ*「吐露する」が表現可能となる。

III–2–2　本写本所収字喃の特徴

上述の南部字喃認定基準を参考に，筆者らによる方言調査結果，出版された方言資料（例えば，Phạm［2009］）等の知見に基づいて字喃の方言性について考察する。本写本においては，字喃ベースの例数が限られることから，（1）に示した基準のうち，ベースとなる字音が漢字音であり，且つ音素の差異を表現できる例である必要がある。それは上記（1.b-3），（1.b-7）を除いた，（1.b-1），（1.b-2），（1.b-4），（1.b-5），（1.b-6）ということになる。また，（1）はあくまで南部字喃の特徴であり，本写本の字喃が南部方言の特徴だけを示すとは限らない点も断っておく。

以上の基準に従い本写本所収の各字喃の読音とそのベースとなる漢字音または字喃字音を比較した結果，（1.b-4）及び（1.b-5）の特徴を示す字喃が 10 例（のべ 13 字）確認された。いずれも字喃読音と声符漢字音の音節末子音の対応に関する問題であるから，まず標準的な字喃作品（北部方言に基づく作品）における実際の対応状況を表 2 に示す。

標準的漢字音をベースとする字喃で執筆された作品に見られる表 2 の状況から明らかなように，3 つの例外的ケースを除いて，基本的に音節末子音については，字喃読音と表音部漢字音には 1 対 1 の対応関係が認められる。3 つの例外的ケースというのは，選択の候補となる漢字音のリストに必要な音素連続のパターンが見いだされないので，やむなく音節末子音を異にする字音を選択したことよりミスマッチが起こったものと判断されるケースである。したがっ

15）Hoàng［2004: 124–125］は，南部方言には元来 /w/ が不在である可能性を指摘している。

て，字喃作成に際して既存の漢字音あるいは字喃読音を選択する際，音節末子音の同一性は，最も高い優先度で重視される基準と言える。

以上を基準として，本写本における音節末子音の対応状況を見ると，標準的漢字音に基づいて見る限りそのルールに反する表3のような例が見られる。因みに，表中の「標準字形」は字書等に見られる一般的な字形を示す。

これらの字形が示す語には，表3「標準字形」のような別の字形が見られ，そこでは音節末子音が字喃読音と表音部漢字音の間で一致していることがわかる。そこから外れる字形が見られることが本写本の性格を決定づける重要な要素となることを指摘する。その特徴を改めて表4にまとめる。

表2　漢喃版『佛説大報父母恩重經』所収字喃の音節末子音対応表［Shimizu 2020］

声符漢字音＼字喃読音	/-p/	/-m/	/-t/	/-n/	/-k/	/-ŋ/	/-j/	/-w/
/-p/	21							
/-m/		54						
/-t/			81		1[c)]			
/-n/		2[a)]		123				
/-k/			1[b)]		76			
/-ŋ/						152		
/-j/ または前舌V							192	
/-w/ または後舌V								78

[a)] *mỉm*：閔，嘿　[b)] *dược*：欲　[c)] *liếc*：列

表3　漢喃版『佛説天地八陽經』所収字喃

所収字喃	読音	表音部漢字音	標準字形	表音部漢字音	本文対応漢語：頁数
𡨸	*biếng*	変 *biến*	丙	*bính*	懈怠：2a4
𢘓	*nhác*	戔 *dát*	落	*lạc*	懈怠：2a4
𢦏	*dứt*	弋 *dặc*	悉	*tất*	休：5b5 滅：6a1, 6b1, 7b1
𢧵	*chắc*	質 *chất*	職	*chức*	固：7b4
𢖏	*miệng*	免 *miễn*	皿	*mãnh*	口：12b3
扌𢦏	*dứt*	弋 *dặc*	悉	*tất*	断：24a3
邛	*đặn*	鄧 *đặng*	憚	*đạn*	皆：27a2
𤞷	*cuốn*	狂 *cuồng*	卷	*quyển*	卷：28b2
𣲖	*lặng*	吝 *lận*	朗	*lãng*	静：31a1
終	*trọn*	終 *chung*	論	*luận*	共：32a5

この状況を生み出す背景にあったと推定される正書法と実際の読音の対応関係を方言毎にまとめたものが表5である。

以上の現象は上記（1.b-4）及び（1.b-5）の例に相当するが，その正確な地理的分布を推定するために，Hoàng［2004］の方言研究に加え，筆者らが行った方言調査［Shimizu 2014］の結果を参照しつつ，現代におけるその分布状況を確認する。まず，Hoàng［2004: 92–93］は現代正書法で *-an*，*-at* と綴られる韻と *-ang*，*-ac* と綴られる韻の発音が異なる地域と合流する地域の境界（等語線）を Quảng Trị 省と Thưa Thiên-Huế 省の境界辺りにあることを指摘した。一方，筆者らが2011年9月と2012年9月に実施した方言調査でも，ほぼ同一の結果が得られた。ここでは，調査語彙（*ơn*「恩」，*ăn*「食べる」）の音節末子音の分布を図1に示す。

図1の地図を見る限り，本写本所収字喃の特徴が示す音韻特徴は，南部だけではなく Thừa Thiên-Huế 省以南に広く見られる特徴であることがわかる。

以上の音節末子音に関する考察に加え，補足的に表3「憂」の音節初頭子音について見ておきたい。当該字の漢字音は *dát*，字喃読音は *nhác* である。一見無関係に見える音対応であるが，Hoàng［2004: 139］は，Bình Trị Thiên 省[16] の一部の農村部及び社会階層で，正書法で *nh-* と綴られる音節初頭子音音素が *d-* の音と合流し［j］と発音される事実を指摘している。[17] 因みに，*nhác* を表記する標準字体「落」（漢字音 *lạc*）は正書法上 *l-* と綴られる音素と *nh-* との関連を前提とするが，それは北部方言でしばしば見られる音の交替現象であり［Gregerson 1969］，そこには逆に北部方言の痕跡がはっきりと見て取れる。このような例が見られることも，字喃の方言性を傍証する貴重な手掛かりである。

表4　表3の諸例における音節末子音の対応

表音部標準漢字音	字喃読音	該当例数
-n/t	-ŋ/k	5
-ŋ/k	-n/t	5

表5　*-n*，*-t*，*-ng*，*-c* の読音（方言間差異）

	正書法	表音部漢字音	字喃読音	正書法
北部（標準）方言	*n, t* *ng, c*	/-n/, /-t/ /-ŋ/, /-k/	/-n/, /-t/ /-ŋ/, /-k/	*n, t* *ng, c*
中部 / 南部方言	*n, t* *ng, c*	/-ŋ/, /-k/	/-ŋ/, /-k/	*n, t* *ng, c*

16）1989年6月30日に Quảng Bình 省，Quảng Trị 省，Thừa Thiên-Huế 省の3省に再分割され現代に至る。
17）筆者らが2009年に Quảng Bình 省 Đồng Hới 市を訪れた際，古老が *nh*à「家」を［ɖaɹ］と発音していたことから，同特徴の北端は現在の Quảng Bình 省に至る可能性がある。

III–3　所収語彙の方言性

次いで，本写本所収語彙の中で，北部方言をベースとする標準的字喃では見られない特徴的な語彙を表6に示す。

残念ながらこれらの語彙は筆者らの調査語彙には含まれていなかったため，方言語彙辞書 Phạm［2009］の記述にしたがい観察する。当該辞書ではベトナム全土を3方言に区分し（語彙によっては省レベルの情報を付加），北部方言を中越国境線～Thanh Hóa 省，中部方言を Nghệ An 省～Bình Thuận 省，南部方言を Đồng Nai 省以南と定義し，個々の方言語彙にラベルを付与している。表6の3語については，表7のように記述されている。

辞書の記述による限り，これらの方言語彙は，南部のみならず中部でも通用する語彙である

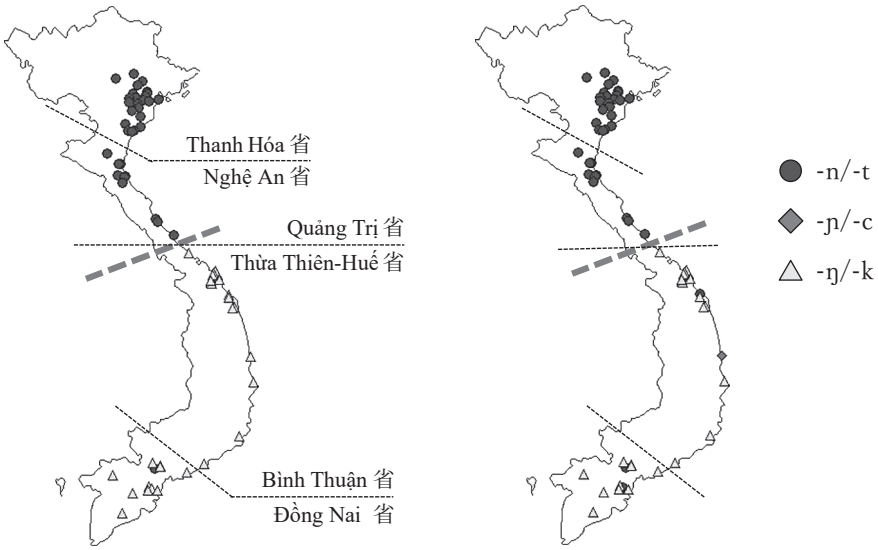


図1　*-n, -t* ≠ *-ng, -c* と *-n, -t* = *-ng, -c* の境界（▬▬▬）

表6　所収方言語彙

字喃	読音	本文対応漢語：頁数
𢧐，𢧐	*vắn*	短：30a5, 2a5
莫	*mắc*	被：8b2
邛（＝鄧）	*đặng*	得：3a1, 4b1, 4b4, 5a5, 6a1, 6b1, 7b2, 7b4, 8a5, 9a2, … 獲：3a2, 5a2, 6a3, … 可：3b1, 4b1, …（計65例）

表 7　方言辞書［Phạm 2009］の記述

語彙	説明[1]	分布地域
vắn	［形容詞］*Ngắn*「短い」（p. 433）	中部・南部
mắc	［動詞］*Gặp phải*「（思わしくない出来事・状況に）でくわす」（p. 284）	中部
đặng	［助詞］*Được*「～できる」，*Để*「～ために」（p. 163）	中部・南部

注：[1] 筆者による和訳を「　」内に付す。

ことがわかる。*mắc* に関しては，むしろ中部方言で主に使用されると記されている。

đặng についてはテキスト全体を通じて 60 回以上出現する語彙であるが，それに相当する北部標準語 *được* は一度も出現しない。また，*đặng* の特徴的な字形「邛」については II に述べた通りである。

IV　写本成立過程をめぐって

桜井［1979］によると，本写本が所蔵されていた景福寺は，檀家がほとんど 1 世，2 世のベトナム人であり，その境内の墓碑銘に記された出身地（本貫地）は，北部が 22 人，中部が 23 人，南部が 3 人とのことである。因みに中部出身者のうち Quảng Trị 以北出身者が 14 人，Thừa Thiên 以南出身者が 9 人とのことである。この事実に関して「バンコクの地理的な位置から，南部出身者の寺を予想していた筆者には意外であった。カンボジア・ラオスと国境を接する各省ではなく，在タイ移民の多くがナムディン・ハドン・ハナム等のデルタ中枢部，またフエなどの中部沿岸人口稠密地帯からでている。」［桜井 1979: 78］と指摘している。この内容を上記考察と照らして考えるならば，この写本に字喃訳文を付した人物は中部以南の出身であり，「フエなどの中部沿岸人口稠密地帯」である可能性も考えられることとなる。[18] ただし，字喃の方言性から見える事実は，あくまで現代の方言分布から見る限り Thừa Thiên-Huế 以南の方言話者が訳文の記述に当たったという可能性である。[19]

一方，1920 年代から 30 年代にかけて，「八陽經」（あるいは南部方言で同音となる「八王經」[20]）の名を冠する，『佛説天地八陽經』の経文をローマ字に転写したテキストが少なくとも 4 種出

18) 因みに，筆者が 2014 年 5 月 25 日に景福寺を訪れた際，ニャチャン出身の僧侶 Nguyên Chơn（源真，法字清海）がベトナム漢字音の指導に当たっていた。

19) 桜井［1979］の記す通り，あくまで檀家の「本貫地」が北部から中部であり，本人は南部からの移住者である可能性は十分考えられる。因みに，天理大学国際学部芹澤知広教授によると，ベトナムやタイの華人移民の墓碑であれば，ベトナムやタイへ入植した 1 世の子孫にあたる，現地で生まれた 2 世以降の人物の場合も，墓碑に中国本土の出身地（本貫地・祖籍地）を記すとのことである。

20)「陽 *dương*」と「王 *vương*」は南部方言でいずれも /jɯːŋ^{1}/ となる。

版されている。また，経文をベトナム語に翻訳した冊子（ただし字喃版の忠実なローマ字転写ではない）が少なくとも1種見られる。[21] 以下，年代順にそのタイトルを示す。

1922年，*Bác Dương Kinh* 八陽經，Saigon.
1932年，*Phật Thuyết Thiên Địa Bác Dương Kinh* 佛説天地八陽經，Chợ lớn.
年代欠，*Phật Thuyết Thiên Địa Bát Dương Kinh diễn nghĩa* 佛説天地八陽經，Chợ lớn.
1937年，*Phật Thuyết Thiên Địa Bác Vương Kinh* 佛説天地八王經，Pnom Penh.
1938年，*Phật Thuyết Thiên Địa Bác Dương Kinh* 佛説天地八陽經，Chợ lớn.

出版年代を欠く *Phật Thuyết Thiên Địa Bát Dương Kinh diễn nghĩa* が，経典本文の後にベトナム語訳を付した版であるが，明らかに1932年版の内容にベトナム語訳を付したものと考えられる。1938年版は，経文が活字の漢字で示され個々の漢字の下にローマ字転写音が付されている。20世紀前半にこれらローマ字転写版が主に南部サイゴンで出版された事実は，字喃対訳版の出現時期を考える上で押さえておくべき事実であろう。

最後に，阮朝（1882年）に成立した地誌『大南一統志』巻之五「廣南省」に見える「…至如語音平亮，視諸省爲適中，雖京師亦以廣南音爲正。」（語音に関しては平亮であり，諸省を見渡しても理に適っている，京師でさえ廣南音を正統とみなしている。）との記述を紹介しておく。これは当時における言語の規範意識を考える上で極めて重要な記述であるが，[22] その拘束力等に関しては稿を改めて考察するとし，ここでは南部特有の字喃字形が成立するだけの社会的背景があった可能性のみ指摘しておく。[23]

おわりに

以上より，桜井氏将来にかかる「景福寺資料」所収漢喃版『佛説天地八陽經』は，19世紀以降に筆写され，ベトナム中部以南の方言に基づき字喃訳文が付された写本であることが明らかとなった。

21) Fulbright University Vietnam 所属 Nguyễn Nam 博士の御教示による。
22) Woodside［1988］は，17世紀から19世紀初頭にかけて，中部から南部にかけての地域が，北部から独立した別個の政治的統合体を成し，それぞれ独自の法制と税制を有していた事実を指摘している。
23) 査読者より，「19世紀末に西山朝と戦っていた阮福映のちの嘉隆帝はフエを追われた後バンコックに逃れ，それからサイゴンに地方政権をたて，ついに阮朝を樹立したわけであるが，Manguin［1984］の研究によればその間に彼の発した字喃の文書がいくつか残っている。フエからバンコクにかけて共通のベトナム人の書字文化が広がっていた可能性も考えられよう。」との貴重なご指摘を頂いた。Manguin に紹介された字喃文書は数が限られており，それを以て直ちに共通の文字文化の存在を仮定することは難しいが，今後同種の資料を含む中・南部の字喃資料を広範に調査することにより，阮氏治下（いわゆる Đàng Trong）における言語的規範性の存在の有無について引き続き考察したい。

本写本の成立が19世紀であるとすると，現代ベトナム語の中部以南の方言に見られる音節末子音 -n/t と -ŋ/k の合流（より正確には -n/t>-ŋ/k の変化）の具体的な段階を示す貴重な資料ということになる。例えば，他の有名な19世紀の南部字喃資料として知られる『蓼雲仙』（または『陸雲仙』，阮廷炤1822～88）にも本資料と同じく -n/t>-ŋ/k の変化を示唆す例が多数見られる。そこに見られる重要な特徴は，-n/t>-ŋ/k の変化が中・後舌単母音及び二重母音を主母音とする音節にのみ観察され，前舌単母音を主母音とする音節には同様の末子音の不一致現象が見られないことである。一方，20世紀初頭の南部字喃資料『今古奇觀』（Nguyễn Văn Thới 1866～1927）においては，前舌単母音を主母音とする音節で，漢字音と字喃読音の間に *-n/t* と *-nh/ch* の不一致を示す字喃の例が多数見られることが知られる［Nguyễn 2009］。この事実は，19世紀から20世紀初頭にかけての南部方言の通時的変化の過程を明瞭に反映している可能性がある。本資料所収字喃の示す音韻特徴が，Thừa Thiên-Huế 省以南に広く一律に分布する音韻特徴である事実を踏まえ，本研究が南部字喃の歴史的展開を考える初歩的考察として位置づけられる点を改めて指摘したい。したがって，III–2–1 で言及した『南部字喃索引』［Vũ 1994］に引用される『蓼雲仙』以外の文学作品（『楊慈何茂』『阮友勳小傳』『金石奇縁』『漁樵問答』等）も，南部方言の通時的音韻変化という観点から改めて見直してみる必要に迫られる。

今回残念ながら分析に至らなかったが，「景福寺資料」の大きな特徴として，手書きのタイ文字によるノーテイションが随所に付されていることが挙げられる。これはタイ語を母語とする僧侶が，個々の字音を読み上げる際のメモとして書き込んだものと思われる。付録2に見えるように，本文の一部の漢字にのみタイ文字ノーテイションが付されていることから，本文を読誦する際に参照されたものと想像される。将来的に，それらタイ文字ノーテイションを分析することにより，当時のベトナム漢字音の特徴の一端が浮き彫りになることが期待される。

参考文献

小島浩之；矢野正隆．2018．「漢字・字喃経典料紙調査概要――東南アジア地域文献の史料論的研究序説」『東京大学経済学部資料室年報』8: 69–75.

小田壽典．2010．『仏説天地八陽神呪経一巻　トルコ語訳の研究　研究編』京都：法蔵館.

桜井由躬雄．1979．「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」『東南アジア――歴史と文化』8: 73–117.

清水政明．1996．「漢文＝字喃文対訳『佛説大報父母恩重經』に見る字喃について」『人間・環境学』5: 83–104.

――――．2022．「チュノムの造字法」『漢字系文字の世界――字体と造字法』日本漢字学会（編），68–89ページ所収．東京：花鳥社.

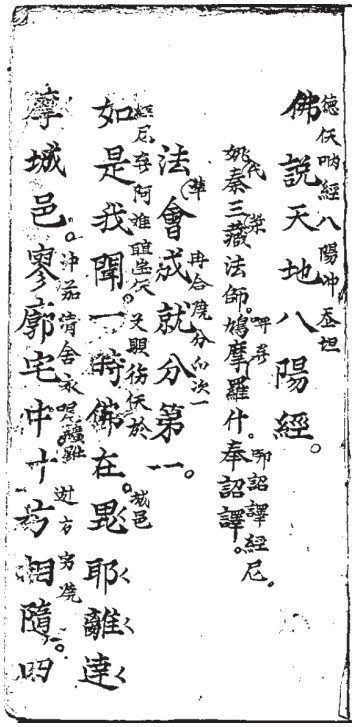
田仲一成．1990．「粤東天地会の組織と演劇」『東洋文化研究所紀要』111: 1–170.

Alves, Mark J. 2014. A Note on the Early Sino-Vietnamese Loanword for ‘Rake/Harrow’. *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 43(1): 32–38.

Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University. 2017. Documentary Research on Han-nom Manuscripts. *IPCR2017*, p. 25.

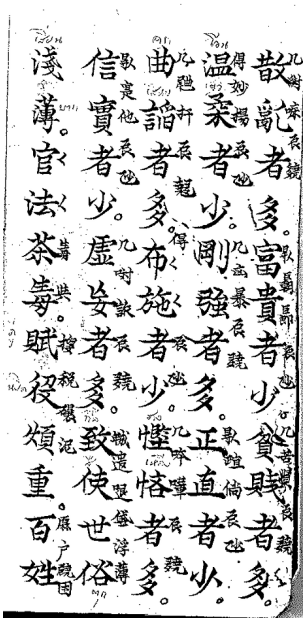
Gregerson, Kenneth J. 1969. A Study of Middle Vietnamese Phonology. *BSEI* 44: 135–193.
Hannas, Wm. C. 1997. *Asia's Orthographic Dilemma*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
Hoàng Thị Châu. 2004. *Phương ngữ học Tiếng Việt*［ベトナム語方言学］. Hà Nội: Nhà xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội.
連雅堂. 1975.『臺灣通史』台北：臺湾時代書局.
Manguin, Pierre-Yves. 1984. *Les Nguyễn, Macau et le Portugal: Aspects politiques et commerciaux d'une relation privilégiée en mer de Chine 1773–1802*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
Ngô Đức Thọ. 1997. *Nghiên cứu chữ húy Việt Nam qua các triều đại (Les caractères interdits au Vietnam à travers l'Histoire)*. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hóa.
Nguyễn Quang Hồng. 2014. *Tự điển chữ Nôm dẫn giải (Dictionary of Nôm characters with Quotations and Annotations)*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội.
Nguyễn Quảng Tuân. 2009. *Mấy nhận xét về cách viết chữ Nôm miền Nam trong truyện Lục Vân Tiên*［『蓼雲仙』中の南部字喃書記法に関する考察］. http://khoavanhoc-ngonngu.edu.vn/en/nghien-cuu/hán-nôm/297-my-nhn-xet-v-cach-vit-ch-nom-min-nam-trong-truyn-lc-van-tien.html.（2022年5月24日閲覧）
Phạm Văn Hảo. 2009. *Từ điển phương ngữ tiếng Việt*［ベトナム語方言辞典］. Hà Nội: Nxb. Khoa học Xã hội.
Shimizu, Masaaki. 2014. The Distribution of Final Palatals in Vietnamese Dialects. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, May 24–25, 2014, Pathumwan Princess Hotel, Bangkok, Thailand, pp. 146–153.
————. 2020. The Diversity of Vietnamese Nôm Characters in Two Buddhist Sutras: 佛説大報父母恩重經 (The Sutra on the Profundity of Filial Love, Spoken by the Buddha) and 佛説天地八陽經 (The Sutra of the Eight Yang of Heaven and Earth, Spoken by the Buddha). Paper presented at the Colloquium on Literacies across East Asia, Oct 30, 2020 (online workshop).
Shimizu, Masaaki; and Kondo, Mika 2017. The Distribution of Diphthongs in Vietnamese Dialects. Paper presented at the 27th annual Southeast Asian Linguistics Society meeting, May 11–13, 2017, Padang, Indonesia.
Vũ Đức Nghiệu. 2019. Vietnamese Initial Consonant Clusters in Quốc Ngữ Documents from the 17th to the Early 19th Centuries. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 12 (1): 143–162.
Vũ Văn Kính. 1994. *Bảng tra chữ Nôm miền Nam*［南部字喃索引］. TP Hồ Chí Minh: Hội ngôn ngữ học TP Hồ Chí Minh.
Woodside, Alexander B. 1988. *Vietnam and the Chinese Model: A Comparative Study of Vietnamese and Chinese Government in the First Half of the Nineteenth Century*. Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University Press.

（2022年5月25日　掲載決定）



[01a1]
德佛吶經八陽冲垩坦
đức Phật nói kinh bát dương trong trời đất
[01a2]
代姚秦柴三藏法師
đời Diêu Tần thầy Tam tạng pháp sư
咿翁鳩摩羅什
là ông Cưu Ma La Thập.
哪詔譯經尼
vâng chiếu dịch kinh này
[01a3]
準法會冉合饒分巴次一
chốn Pháp Hội nhẹm hợp nhiều phân làm thứ nhất
[01a4]
經尼翁阿難聒徵佛
kinh này ông A Nan nghe chưng Phật
爻唄德佛於
một buổi đức Phật ở
城邑毘耶離達
thành ấp Tỳ Da Ly Đạt
[01a5]
摩
Ma
冲茄清舍永喔穰{□尾仕}
trong nhà Thanh xá vĩnh Vái rộng rãi.
迸方穷蹺
mười phương cùng theo

付録１　第一葉表（1a）の画像と字喃ローマ字転写



付録２　タイ文字によるノーテイションの例（2b）